



曲譜  
正調

筑前琵琶歌

水也田旭嶺春

特 110  
411

276  
477



始



次刊 夏の巻 歌曲順序

- |      |      |       |
|------|------|-------|
| 春日野  | 四條畷  | 静波前上段 |
| 台湾入  | 竹林只七 | 全 下段  |
| 河内の宿 | 叢雲   | 盆栽樹   |
| 松の廊下 | 宇治川  | 金州南山  |
| 扇の的  | 湊川   | 日本舞   |
| 石童丸  | 梅若丸  |       |
| 太田道灌 | 海洋島  | 以上    |

特11  
41

序

近時我が国前琵琶と旭日昇天の勢ひと  
 家庭音楽として紳士淑女の間に歓迎せられ  
 一方は劇界に迄も琵琶を事んに利用する程ふ  
 成まると茲數年間急進の發展を遂げたるが之に  
 伴つて琵琶乃著書は深山茂林に於て居りますが  
 世譜の如く、文章の間違ひの無い完全なる著書乃



是のほ資に嘆かわしい事とあります  
 茲に於て編者が多年の研究しつゝ、  
 譜を附し春(初傳)夏(中傳)秋(典傳)冬(皆傳)乃  
 四卷ふかから本書を發行せんとする者也

大正三年九月

水田旭嶺識

目次

目次

君の代	一頁	錦の沖旗上段	二九頁
敦盛	上段二頁	錦の沖旗下段	三四頁
敦盛	下段八頁	赤垣源藏	三八頁
城山	一四頁	月照	四三頁
小督局	一八頁	常陸丸	四八頁
八幡太郎義家	二五頁	備後三郎	五三頁

平野次郎	五九頁
白虎隊	六六頁
廣瀬中佐	七一頁
蕾の花	七七頁
曾我	八五頁
木村長門守	九一頁
匂當内侍	九八頁

目次

曲譜及曲節

冬	秋	夏	春	〽	〽	一	二	三	四	五	六	七	甲	乙	音	調
冬節	秋節	夏節	春節	流しの譜	合の手の譜											

山 旭 ク ツ 月 タ 可<sup>風</sup> 9

山越節

旭節

雲節

露節

月節

夕日節

大落し小落し

憂愁譜

フニ

フ三

悲哀の譜

崩勇壯の譜

五絃節及士段秋曲の合手

吟變(例せば五六の中間の声)

續 ぎ

歌又は歌の類

詩又は詩の類

琵琶の合の手

番、号、丁、鳥名  
木、火、土、金、水、地、天

口 〇 | ㄥ ☆ ㄇ ㄣ

Handwritten musical notation consisting of several curved lines on a staff.

淘ウツ伸スベ上アげ

伸ノべ上アげ

淘ウツ伸スベ下サげ

伸ノへ下サげ

抄サクひ上アげ

強ツヨクめ

大廻オホマわ淘ウツ伸スベ

淘ウツり廻マわ

フ四

# 筑前琵琶歌

初傳の巻

水也田 旭嶺 編纂 作曲

## 君きみの代よ

一  
めでたやな君が恵みは四方の

四方の景色を眺みめれば

谷やの小川に龜かめあそぶ

巖いわとなりて苔こけの蒸むす

五  
まをりのどけき春はるの日に

六  
峰みねの小松こまつに雛ひな鶴つるすそ

七  
千代ちよひにふ代ふよにまをれる石いしの

八  
あめつちくれをやぶらず

初音

風枝をなぶりさず

民のかまどぶあつとして

仁義心りも君う代

榮之行くをめでたけれ

敦 盛

祇園精舎の鐘の聲

娑羅双樹の花の色

千草薺は花咲き實れ

國も世もかたをさまり

榮え幾千代めでたけれ

上巻

諸行は無常の郷音あり

盛者必衰の理を現はす

驚き平家の榮華の夢も

嵐に醒めて 潮名馬

帝の音を磯に残しつ

茲も平家方の一門にて

無官の太夫 敦盛は

駒を早めて 唯一騎

既に河原船より兵船も

ひよとり越を吹き下す

須磨の浦曲の友千馬

影は浪間にかられけり

老を識 経盛の三男

父兄弟のあとをしたひ

連れも 渚につき 結ひが

途かの沖に漕出けれバ

詮方浪に駒をいれ  
心の中の淋しさを  
むれを競れし子雀の  
衰れと云ふも愚なり  
如月七日の曙のに  
名残は猶も絶果てぬ  
淡路島根や河波の沖

四五段ばかり詠がせ給へ  
持し測り終らするに  
ねどら索ある風情を  
時しも涙は青永三年  
吹きすすみたる北風の  
身の浮き沈み泡沫の  
通ふ千島のそれをぞ

駒の足搔もにぶりつ  
任せて子綱かくりつ  
引き返さざと祈れども  
山抜く力ら軟よ竹の  
ゆたのたゆたに漂ふは  
立田の川に散り浮ぶ  
斯る處に熊谷次郎直實

今や行手も白浪に  
あせる心は癖なり  
時に利あらず灘ゆかす  
青葉の笛を身に帯びて  
唯だひとひらの紅葉々の  
様も是ゆる計りなり  
はるかにはとあ追ひ来り



五 渾身 サツト 打ち 開き  
 四 平家 の 沖大將 と 見奉る  
 三 見せ 給ふ もの かな  
 二 歌 に 聲 を 掛け ら れ て  
 一 敦盛 駒 の 立髪 立なほし  
 五 熊谷 駒 を 馳せ 寄せて  
 四 テウク シー と 切結び が  
 三 四番

四 其れ に 渡ら せ 給ふ は  
 三 まさ なう も 歌 に 背面 を  
 二 返さ 給ふ と 呼は たり  
 一 いか で 猶豫 の ある べき ぞ  
 五 汀 の 方 に 引返 し 給ふ は  
 四 互 に 打と の 抜き かざ し  
 三 忽ち 馬上 に 引組 ん で  
 二 三番  
 一 四番

六 浪う ち 際 に ドウ と 落つ  
 五 熊谷 遂に 敦盛 を 組敷 きて  
 四 御覽 を 押し 上げ 見ま した  
 三 年ハ 一ツ さと 桂 の 花  
 二 光あ られん よそ ほい は  
 一 朝日 の 匂ふ それ より も  
 下 畫か まほしき 氣色 なり  
 三番  
 四番

三 暫一 が 程 まで 揉合 して  
 二 概に 押首 し 上げん と して  
 一 薄化粧 に 鐵漿 黒く  
 露も したる 玉の 面  
 天津 乙女 の 顔ば せに  
 一入 まさる あで やかさ  
 さすが に 猛き 熊谷 も  
 三番  
 四番

年ば(同じ)小次郎に

焼野の雉ききすは夜よの鶉うす

子を思はぬぞなかりけるきり

敦盛あつもり

開一

去程きりは熊谷は

あまり活い痛いたはと候ゆう

御おん名なをな顯あしは緒いとかと申ましけるる

思おもひを綴つづて手てもゆもも

貴ききを賤せんもも押おすも

子を思はぬぞなかりけるきり

(下段)

敦盛あつもりをを抱かき起し起

御おん助すけけを進すすらせん去逆さかれる

敦盛あつもり静しずかた御おん顔かほをを上あげ給ひひ

今いま名な乗のりらずもも隠かくれおはし

若わかしも見み知しらずとならば

蒲よもぎのの冠かんむり者ものもも見み知しらずとならば

唯ただ叢くさむら中ちゆうにに捨すて給へ給ひけるる

平家へいけ二に十じゆ餘じゆ年ねんのの夢ゆめののあとあと

打うつし打うたるもも前まへ世よのの因果いんぐわ

熊谷くまが敦盛あつもりのの水みづをを取とりり

唯ただ我われ首くびをを打うち義経よしかにに見みせ給へ給ひひ

蒲よもぎのの冠かんむり者ものにに見みせ給へ給ひひ

其その時ときももはは名なももなきなき者ものととし

さてはさては由よし緒いとあるある八やち達たつままぞぞおおははすすん

権けん花はな一いつ朝あさのの榮さかにに異ことらす

忽たちちち悟さとるる浮う世よのの無む常じよう

さらばさらば此こゝ候ま中ちゆう迄いた延の緒いとひひ候まとと

④ 鎧の塵を拂ひ進らせけり  
まじり 十ん号

⑤ 早や引揚げの陣鐘なりひびき  
サ三下

⑥ 五十騎許り打群れて  
む

⑦ 熊谷これに打ち發馬き  
かどろ 七号

⑧ 如何にも一りて  
か

⑨ 味方の軍兵近きたれど  
ちかづ

⑩ いかゞはせん」と熊谷は

④ 折もこそあれ後の山に  
いけら

⑤ 土肥梶原の一族ども

⑥ 此方を指して東掛りければ  
まが

⑦ 備も河運の末と見え奉る  
すえ 四号

⑧ 落し進らせんと思ひも  
ま

⑨ よも遁れま結ぶ事叶ふまじ  
結

⑩ 深き愁に沈みけり  
うれひ 十二号

④ 敦盛靜かに熊谷をみそなほし  
静

⑤ 殿もき者の手に掛りば  
静

⑥ 御身の如き情ある  
ちかけ

⑦ 早首打てや熊谷と  
静

⑧ 眞實は此の言葉を聴き奉り  
まこと 金下

⑨ 一入感一居たりしが  
水

⑩ 最早是非なりと諦めつ  
あきらむ 水

④ 假令此處を遁ると行光とて  
たとい

⑤ なんばり無念に候ぞ  
静

⑥ 武士の手に掛らん事か懐き  
静

⑦ 少も動かさ給ふ流氣色は  
静

⑧ 流石は平家の公達よと  
静

⑨ 追々せまる馬蹄の音  
十五号

⑩ 斯く相成り候う上は

所詮清運もきはまれり 二号

後の所供養をもはらん

敦盛達には座敷を伏拜み

無量の思やこもるらん 十三号

いざさらば熊谷と

熊谷は情に萎し腕にも 地

生者必滅會者定離 一ヤウシヤウのウチアチヤウチヤウ

哀れ直實がひに掛奉り

許させ給へと立上れむ 一号

ほろりと落す一と際 一号

漸として涙を打拂ひ 一号

合掌してぞ居直りける 廿号

弥院の利劔を揮りかざし 水地天

未来は一蓮託生と たしし

方刀風流と敦盛の

鬼をもひぐ熊谷も

岩が根に生ふ松にだに

嗚呼敦盛の健氣なる ケキ

花の中なる花なるらん 二号

源清き白旗に 秋

散すも散るも花の縁 えん

花の首を散らしける 鳴

暫く御腸の涙に暮けるは たぢやう

時雨のさそふ如くなり しよれ

心の程は紅ゆの ほろ

ア、熊谷が情こそ 一号

草木もなびく基なるらん もと

後関ふ人の袖の上に ち

露ぞ置そふ一の谷

昔語りを今爰に

搔き鳴したる琵琶の音や

千代の松風千代掛せ

四つの浦づくに残しけり

調づの糸に傳つけり

城山

まれ達人は大観す

坂山蓋世の勇あるも

榮枯は夢か幻か

大隅山の狩座に

真如の月の影清く

無念無想を觀ずらん

何を怒るや怒り猪の

俄かに激する数千騎の

勇みに勇むはやり雄の

騎虎の執ひ一蹴に

留まり難きぞ是非なき

唯た身一つを打擽て、

若殿原に報いなん

明治十年の秋の末

諸手の軍打破れ

討ちつ討たれつやかて散る

霜の紅葉の紅ゆの

血汐に深めど返り見ぬ

薩摩武雄のおたげびに

打散る玉は板屋打つ

三 雲散たむらる如くにて

七 本魂たまに御音く鯨波の聲

一 落つるが如き有様を

五 あり勇まししの人々や

六 腕の力も試し見えて

五 いざ諸共に塵の世を

一 孤軍奮闘衝圍破

酒を向けん方ぞたのま

百の雷一時に

隆盛打見てホぞ笑み

亥の年以來やしなひし

心に残る事もなし

蹴れ出んは此時と

一百里程壘壁間

わがけんすてにまれわかたま たはる  
吾劍折已吾馬斃死

唯た一言を名残にて

宗徒のともから諸共に

心の内こそ勇しけれ

昨日の陸軍大将と仰かれ

類なかりし英雄も

山下露と消え果て

しうふうほねとらむちこまのやま  
秋風埋骨故郷山

相野村田をはしめし

煙りと消えし大丈夫の

官軍これを切望み見て

君の寵遇世のおぼえ

今日は敢なく岩崎の

移れば愛る壺の中の

中  
無常を深く感じつゝ

唯た悄然と隊伍を纏ぐ

折ししあれや吹き下す

岩間ふむせぶ谷水の

悲鳴するかと聞きなれ

鎧の袖を濡しけり

小督の局

下  
無量の思ひ胸も満ち

目と目と見合す許りなり

城山松の夕あらし

無常の聲も何となく

鎧の袖を濡しけり

叔も櫻町中納言

小督の局と申しけるは

君の沖籠愛液からず

漸ぞとも思ひ合されど

花に嵐の妬とかや

惚める由を聞き給ひ

我このまことに仕つなば

重範卿の所息女

禁中第一の美人と

驪山宮の故事を

月には雲の仇ありて

時の相國清盛の

身は数としも思はねど

君の沖籠た悪かりなむと

心定めつうを玉の

内裏を思ひ出で絡ふ五号

世に群言ふべき物なま水

悩ませ絡ふ御有様三

折しも中秋三五の夜春

御聲いとも曇らせ絡ひ四号

小督は嵯峨のわたりなる

園をたよりになきなま六

されば君の御嘆き三

晝はひねもす夜は通夜五

よその秋も折ぬべし九番

月は澄めども御涙に中

いかにも御網承はれ三

片折戸せし賤が家に三

思ひ居る御聞つるぞ八番

尋ね来よとを仰せける四番

寮の駿馬に跨りつ水地

月毛の駒よ心して五

急ぐ心の行方かな六

金盤ひや、かに七

貝欄寒ーとかや五

汝これよりおもむきて六

これは彈正大弼仲國は七

やがて出つるや秋の夜の八

雲井にかけれ時の間も九

露は玉屑に和して十

月は珠光を射て十一

在五の庄の男鹿鳥十二



其山里と詠じけん  
命と倉と虫の音と  
地上の星と現るまで  
道の線も絶えたれば  
馬の蹄に踏んだき  
尋ねわびつて仲國は  
しつぐ馬を打せける

暖城のわたりの秋の夜を  
共に澄ゆる月の歌  
光るは露か玉辭の  
真敷をすぎかかやを  
遠の賤が家近の門  
法輪の方つ志ざし  
掉まや小督の句は

廿二

内懐をさませ結ひてより  
名残の露に映さく  
明日は大原の別所と  
今宵限りの別れぞと  
琴彈出で端近う  
月も仄心に澄み昇りて  
葎か下の虫の音も

日数も茲に故郷の  
懨とびまなき物思ひ  
かねて心ふ期し終つは  
主の妻のしこふがま  
座につき終ふ時しとあれ  
塵と見ると雲とを  
秋や恨むる遠ぞうき

廿三

初音

山上 何をかうねる女郎花

中 我も渡世のさかの身を

下に 人に語るも耻かきと

かきなす琴の道から

遠音に渡へて通ひ来る

峰の嵐か松風か

尋ぬる人の琴の音か

駒を止めて聞かざらば

孤音しるき想夫戀

さてこそ小督の局ぞと

心づかに仲國は

露深き草原を踏分け

庵つこもは着にける

庵にこそは着にける

八幡太郎義家

文武は車の両輪の如く

また馬の両翼の如し

文有りと武を分ければ弱

武ありて文を分ければ敗

柳八幡太郎義家は

勇武の氣性を父に傳

孫吳の兵法を匡房に學び

文武を兼ねる名將と

知らぬ者こそなかりける

茲に新羅三郎義光は

奥州の合戦急なりと聞き

先義家をたすけむと

いそかに都を立ち出でて

義家に對面せられければ

誠に況弟ちればこそ

今足下をここに見るとは

まみえつる將にも候へ

河原に咽はせ給ひける

戒法の袖をしぼりけり

奥州に下り着き給ひ

義家義光の片手を取り

能く遅々下り給ひよま

故入道殿の蘇生らむ

祝著の至りと宜ひつ

臣下の人々これを見て

時しも寛治五年九月中旬

はれ吹きしきる秋風に

陣營外に義家は

雲井を渡るかりがねの

四方にバツと飛び散れり

兵法に雁行の亂るは

一定此野に伏兵ありむ

従ふ軍兵走せ給て

馬のたてがみ癩かせて

立出で給ふ折しもあれ

羽並たちまら打亂れ

義家此さまを見給いて

伏兵あるなりといへり

疾く披し隙ありと宜ひければ

叢中を追い立つれば

柳に違はず影多の敵兵

スワ逃すなと追撃すし

心地よかりし次第なり

結髪従軍弓箭雄

白旗不動兵營静

斯て其後義家は

心に飾るあやふしき

此所彼所より隨出でたり

一人も餘さず討留は

八州草木識威风

立馬邊城看亂鴻

賊の大將家衡等謀討し

重ぬてきたる都路や

柳をさらせし

聲もちまたに聞えけり

文の林に残りける

錦の御旗

天照す日の影映る

瑞穂の國は昔より

諸も元弘元年の頃かよ

かちどまゝ

これぞ後三年の戦とて

文の林に残りける

(上段)

真名井の流れ末清き

武勇忠義の人多し

後醍醐帝の二の皇子

大塔の宮二臨親王は

逆臣追討の神謀ありけるが

賊の勢ひ日に暮りければ

御身を置き給ふ所なき

御洪の人々には

光林房玄尊

片岡八郎武藏坊

南都の般若寺に忍座を給ひて

笠置の城に縮りて

天地廣くといへども

熊野を指す落ち給ふ

律師赤松測祐

木寺の相模岡本三河房

平賀三郎矢田彦七

世一

三十

村上亮四郎 義統

宮をけしめ奉り

兜沖眉深に波りて

熊野詣によもほひたり

華厳香車を送ますさぬ

長途如何にも思ひに

社々の御清り

彼堤の丸人なり

柿の衣に篋を掛け

先達に作り山伏の

龍樓鳳閣に人とたり

雲上人の御歩行は

草臥れ給ふれ氣色も

宿りくの所つとめ

露も<sup>三</sup>怠り<sup>三</sup> 宿はねは

見とが<sup>二</sup>せる事<sup>三</sup>なかりけり<sup>九</sup>

沖<sup>下</sup>ゆく舟の<sup>中</sup>楫<sup>九</sup>を<sup>九</sup>絶え

し<sup>下</sup>らぬ波路<sup>中</sup>に<sup>中</sup>鳴く千鳥<sup>下</sup>

うす<sup>中</sup>紫の<sup>中</sup>藤代<sup>中</sup>の

和歌吹<sup>上</sup>上げを<sup>上</sup>外<sup>上</sup>に見て

光<sup>三</sup>も<sup>三</sup>今は<sup>三</sup>は<sup>三</sup>さ<sup>三</sup>ら<sup>三</sup>り<sup>三</sup>で<sup>三</sup>だ<sup>三</sup>に

勤<sup>三</sup>修<sup>三</sup>を<sup>三</sup>務<sup>三</sup>める<sup>三</sup>先<sup>三</sup>達<sup>三</sup>

由良<sup>六</sup>の<sup>六</sup>港<sup>六</sup>を<sup>六</sup>見<sup>六</sup>渡<sup>六</sup>せば<sup>六</sup>

浦<sup>中</sup>の<sup>中</sup>濱<sup>中</sup>ゆ<sup>中</sup>ふ<sup>中</sup>浅<sup>中</sup>重<sup>中</sup>と<sup>中</sup>し

紀<sup>上</sup>伊<sup>上</sup>路<sup>上</sup>の<sup>上</sup>遠<sup>上</sup>山<sup>上</sup>渺<sup>上</sup>々<sup>上</sup>

松<sup>下</sup>に<sup>下</sup>か<sup>下</sup>れ<sup>下</sup>る<sup>下</sup>磯<sup>下</sup>の<sup>下</sup>波<sup>下</sup>

月<sup>下</sup>に<sup>下</sup>磨<sup>下</sup>け<sup>下</sup>る<sup>下</sup>玉<sup>下</sup>津<sup>下</sup>島<sup>下</sup>

長<sup>三</sup>所<sup>三</sup>曲<sup>三</sup>浦<sup>三</sup>の<sup>三</sup>旅<sup>三</sup>の<sup>三</sup>道<sup>三</sup>

心<sup>三</sup>を<sup>三</sup>碎<sup>三</sup>り<sup>三</sup>習<sup>三</sup>ひ<sup>三</sup>た<sup>三</sup>ら<sup>三</sup>る<sup>三</sup>に

夕<sup>上</sup>を<sup>上</sup>送<sup>上</sup>る<sup>上</sup>遠<sup>上</sup>寺<sup>上</sup>の<sup>上</sup>鐘<sup>上</sup>

切<sup>上</sup>目の<sup>上</sup>玉<sup>上</sup>子<sup>上</sup>に<sup>上</sup>着<sup>上</sup>き<sup>上</sup>宿<sup>上</sup>ふ

朝<sup>上</sup>家の<sup>上</sup>榮<sup>上</sup>え<sup>上</sup>を<sup>上</sup>通<sup>上</sup>極<sup>上</sup>ら

宮<sup>三</sup>の<sup>三</sup>柳<sup>三</sup>心<sup>三</sup>推<sup>三</sup>は<sup>三</sup>かり

斯<sup>上</sup>て<sup>上</sup>十<sup>上</sup>津<sup>上</sup>川<sup>上</sup>の<sup>上</sup>岸<sup>上</sup>竹<sup>上</sup>原<sup>上</sup>に

此<sup>三</sup>處<sup>三</sup>に<sup>三</sup>も<sup>三</sup>長<sup>三</sup>と<sup>三</sup>あ<sup>三</sup>り<sup>三</sup>か<sup>三</sup>ね<sup>三</sup>て

雨<sup>三</sup>を<sup>三</sup>合<sup>三</sup>め<sup>三</sup>る<sup>三</sup>孤<sup>三</sup>村<sup>三</sup>の<sup>三</sup>柳<sup>三</sup>

哀<sup>上</sup>を<sup>上</sup>催<sup>上</sup>す<sup>上</sup>黄<sup>上</sup>昏<sup>上</sup>に

濛<sup>上</sup>濛<sup>上</sup>に<sup>上</sup>袖<sup>上</sup>を<sup>上</sup>か<sup>上</sup>た<sup>上</sup>し<sup>上</sup>き<sup>上</sup>て

祈<sup>上</sup>り<sup>上</sup>申<sup>上</sup>させ<sup>上</sup>宿<sup>上</sup>ひ<sup>上</sup>け<sup>上</sup>る

結<sup>上</sup>く<sup>上</sup>袖<sup>上</sup>を<sup>上</sup>ぞ<sup>上</sup>濡<sup>上</sup>け<sup>上</sup>り

な<sup>上</sup>ま<sup>上</sup>り<sup>上</sup>て<sup>上</sup>暫<sup>上</sup>し<sup>上</sup>居<sup>上</sup>宿<sup>上</sup>へ<sup>上</sup>ど

高<sup>上</sup>野<sup>上</sup>の<sup>上</sup>方<sup>上</sup>へ<sup>上</sup>落<sup>上</sup>き<sup>上</sup>せ<sup>上</sup>宿<sup>上</sup>ふ

高野の方へと落ちさせ給ふ

錦の沖旗

茲小妹加瀬佐詞とて

宮をきつて申す様

鎌倉よりぞ罪せられむ

いかにも畏れ多ければ

左なくば一人御供を

(下段)

職に一味の侍ひの

道通し申しなば

さはいへ宮に朽吟とは

錦の沖旗賜るか

止めて証據にせんとは

股肱の臣を一人だに

証方なるとも沖旗を

懼かに遁れ給ひけり

草鞋の踏や切にけん

宮に追討申さんと

左司に齋と竹達より

錦の沖旗なり

いかで誠一給ふづき

彼に與つて虎の口

斯所に村上彦四郎義光は

追に後れたりしかば

足疾く過ぐる斬しとあれ

下僕が持てる旗見れば

不思議に思ひ尋ねれば

津云々と落ふるに  
くわつと怒りて打たらみ  
落しつゝも畏くも  
天子の沖子潮敵を  
御河出ある道にして  
かゝる譯働すまきかと  
大の男を掻攫み

義光これと聞きて敬す  
こはそも如何に何事を  
四海の主に神座ます  
追討あらん其為に  
秘等如き下郎驍  
持たるは旗を奪ひ取り  
四五丈許り投げたるは

獅子の蒼くは暎たらず  
妹加瀬庄司一言も  
義光河旗を盾に懸け  
油前にはれし事油  
宮は喜びて治すの  
たち増れりとのでまじぬ  
吉野の奥の戦ひに

此経功に恐れけむ  
半句も變てすのみけり  
程なく宮に追着きて  
具に申し上るかは  
此宮黝が勇氣にも  
其のみならず義光は  
宮に代りて討死し



夏上  
沙旗にうちたる日月の

義士とたつて瀟沔の

鑑とこそは仰がるれ

赤垣源藏

黄濬告ぐる鏡の暗し

連れて降り来る白雪の

涙は冷滑子の涙と

光あらそふ忠臣の

君に仕ふる人臣の

鑑とこそは仰がるれ

凍りがちたりる鏡の

積る恨みの君の仇

廻ふところの赤垣が

人目歎く泥解の

何彌陀かづきの破笠に

玉を泡みし襦袢かき

哀別離苦をぐひ谷の

柴田が宅の勝手口

如何暮させ給ふらむ

許多の奴婢は顔見合

威儀漸したる千鳥足

赤き冷羽をまといは

これや一妾の別れを

醉にかしてトボく

今日の寒さに況上は

取次せよと命ずれば

何時もながらの船漸に

眉をひそめて鼻に袖  
沖内室には沖病氣と  
とも本意なき思ひが  
下 雅へ未ぬる德利酒  
畔は儘して起上り  
或る大名に抱へられ  
思はば長き月と日の

主人は清殿に出で結ひ  
つれなき言葉に種置は  
証なき事とおきらめつ  
涙と共に飲みながら  
我は冷廻西國の  
明日は未明に立つぞかし  
浪々の身を種々に

夢り結ひ一清高恩  
朝霜暮雪の折なれば  
清夫婦共百年の  
具に申し上げてよと  
露の命の果敢なきを  
諸行無常と響くめり  
外に立出でて一標

死しても志却はらさず  
必すとはせ給ふ様  
清壽命祈り奉る楮  
残す言葉の末に置く  
さとするに似たる鐘の音は  
早や小夜すぎと未垣が  
ほろりりと渡り玉辭の

道は迷はぬ忠臣義士 四番

身寄浮雲滄海東

看花對月無限恨

宗徒の武士に後れじと

岩をも激す緑の芳

中を命の捨て所

心も思き後部屋の

久誤恩義世塵常

散為曉天草木風

雲を蹴立て一筋に

いき柳け方や月雲の

天よ別よと押寄せて

内に隠れし吉良義央を

深煙の中に引据ゑて

殊に深めたる韓紅

天地にひびく凱歌の

語り傳へて武士の

人は朽ても消えぬ名の

榮へ行くことを捨てけれ

月 思

四十七士が尖刀を

花咲く春の心地して

聲があらぬか今の世に

船とこそは何がるれ

榮へ行くことを捨てけれ

<sup>三</sup>花の都も秋はなほ  
<sup>三</sup>名は流れたる清氷や  
<sup>六</sup>秋の葉色の深むこと  
<sup>四</sup>亂れゆく世の浪花は  
<sup>三</sup>猶世の爲め小身をとりし  
<sup>六</sup>波瀾の岸の波をらぬ  
<sup>五</sup>色も渡らぬ青柳の

<sup>三</sup>夕べ淋き風情なり  
<sup>六</sup>落来る瀧の音  
<sup>五</sup>散るや紅葉のちり  
<sup>三</sup>蘆のさはりは響くとし  
<sup>九</sup>遠さんともて筑紫濱  
<sup>六</sup>標せうか深みどり  
<sup>三</sup>驛路越つて香推寫

四十四日

<sup>三</sup>多田羅の橋を打渡り  
<sup>六</sup>萬代かけて君が代の  
<sup>六</sup>神に歩みを箱崎の  
<sup>三</sup>筆のまをよく問へば  
<sup>三</sup>御はをば下しませりつ  
<sup>六</sup>鐘ねく志ら浪の  
<sup>三</sup>浪又浦回の妙だすき

<sup>三</sup>千代の松原千代かけて  
<sup>六</sup>千歳の松によそつつく  
<sup>六</sup>社にかけし四ツ文字の  
<sup>三</sup>延喜の帝畏くも  
<sup>五</sup>溪も昔は石畳  
<sup>三</sup>よせし昔を忘れどと  
<sup>六</sup>かけて敷る椿れなり

四十五

キニス

需衣塚のぬれごころも  
やがて博多の假住居  
又折々先は薩摩寫  
心細くも都にて  
たよもは心氣無業寫  
諸らふ人も寝き枕  
野間の關原のせき守に

我身に着たる心地あり  
こころも浪風さあがり  
沖の小島にあらぬども  
誰かあはれと思ふらん  
一人の外に打ちあはせ  
波路へだてし行道の  
せき止められて又船ふ

春上  
乗るまもそれと夜やみに  
運の瀬戸丁名とりしや  
翼縮めて潜みしが  
日向を指して船出せし  
願く月と諸ともにて  
身は大君のたのみにとて  
如何なる縁先の壺に

ゆられ〜て行先は  
瀬で鹿兒島がこの鴉  
又本枯に後馬きて  
日は神無月望の夜の  
照り輝きそて寝るなき  
茲に一人の薩摩人  
契りし深き船の沖

三 底の藻屑となりぬるを  
耀の標下の露ほども

立ちさわけども甲斐なき

三 鳩より外はなかりけり

常陸丸

三 征露の軍やりくに

三 煥姐も既に打やぶり

乗合ふ人も船人も

さりとはい知らぬ白浪の

猶東雲のあけがらす

進み進みて南山の

音に聞えし要害の

三 進み進みて南山の  
音に聞えし要害の

四 旅順港も潤澤し

五 君が稜威の旗風に

七 時も頃は明治二十有五年

六 玄海灘の只中に

中 旗翻つす常陸丸

春 船路はなれて白波の

七 何を荒ふる荒潮の

三 鷗の棲むてふ満海も

六 今は靡かぬ草となし

五 かも水無月仲の五日

吹く朝風に日の丸の

下 佐渡も續て進み行く

下 寄る邊は如何に遠からん

六 逆巻く中に黒潮

只一筋に走り来て  
 我を取巻く敵の艦  
 六は何事と言ふ間なく  
 亂射亂撃兩あられ  
 七進み随れん踏もなし  
 五千里を走る猛獸も  
 六水に入りては如何せん  
 五萬里を翔る大鵬も  
 七波には羽異折れぬづい  
 五心ばかりは逸れども  
 六運送船の懸しさに  
 三進退爰にきはまりて  
 三詮方なくも敵艦に  
 五王はてしぞ是非なし  
 十四号上

佐渡は如何にも舞むれば  
 三霧に瀾りわかぬども  
 三同一様なる運の末  
 四輸送指揮官須知中佐  
 四是迄なりや思ひけん  
 五大久保少尉の捧げたる  
 六聯隊旗をば手に取りて  
 三火を放ちて焼きたれば  
 三都の方を伏しおがみ  
 四貴重品の品をば焼捨ける  
 五各將校もとりくぐりに  
 五中佐は陣刃逆手に振り  
 五此有様をお見つゝ  
 五無念の齒かみ凄じく  
 十五号

霧に瀾りわかぬども  
 輸送指揮官須知中佐  
 大久保少尉の捧げたる  
 都の方を伏しおがみ  
 各將校もとりくぐりに  
 此有様をお見つゝ  
 無念の齒かみ凄じく  
 十五号

腹かき切つてを<sup>三</sup>決<sup>一</sup>にける  
同<sup>六</sup>じ枕<sup>七</sup>に伏<sup>八</sup>にげり  
甲<sup>六</sup>板<sup>七</sup>の上は<sup>八</sup>屍<sup>九</sup>の山  
波<sup>六</sup>は<sup>七</sup>あけ<sup>八</sup>に<sup>九</sup>を<sup>一〇</sup>變<sup>一一</sup>じける  
潮<sup>三</sup>の泡<sup>四</sup>と消<sup>五</sup>えて行<sup>六</sup>く  
夕<sup>七</sup>陽<sup>八</sup>は波<sup>九</sup>におち<sup>一〇</sup>ざれど  
あ<sup>三</sup>やめ<sup>四</sup>も<sup>五</sup>分<sup>六</sup>ぬ<sup>七</sup>ば<sup>八</sup>か<sup>九</sup>り<sup>一〇</sup>なり

連<sup>三</sup>なる將<sup>四</sup>校<sup>五</sup>下<sup>六</sup>士<sup>七</sup>卒<sup>八</sup>も  
世<sup>七</sup>時<sup>八</sup>敵<sup>九</sup>彈<sup>一〇</sup>ま<sup>一一</sup>す<sup>一二</sup>く<sup>一三</sup>加<sup>一四</sup>は<sup>一五</sup>れば  
流<sup>五</sup>る<sup>六</sup>血<sup>七</sup>沙<sup>八</sup>に<sup>九</sup>玄<sup>一〇</sup>海<sup>一一</sup>の  
君<sup>三</sup>萬<sup>四</sup>歲<sup>五</sup>の<sup>六</sup>濟<sup>七</sup>ほ<sup>八</sup>そ<sup>九</sup>く  
ア<sup>九</sup>ハ<sup>一〇</sup>レ<sup>一一</sup>果<sup>一二</sup>敢<sup>一三</sup>な<sup>一四</sup>ま<sup>一五</sup>き<sup>一六</sup>常<sup>一七</sup>陸<sup>一八</sup>丸<sup>一九</sup>  
霧<sup>五</sup>立ち<sup>六</sup>お<sup>七</sup>ほ<sup>八</sup>ふ<sup>九</sup>海<sup>一〇</sup>の上<sup>一一</sup>  
あ<sup>二</sup>く<sup>三</sup>一<sup>四</sup>聯<sup>五</sup>隊<sup>六</sup>の<sup>七</sup>我<sup>八</sup>勇<sup>九</sup>士<sup>一〇</sup>

駒<sup>五</sup>の<sup>六</sup>ひ<sup>七</sup>づ<sup>八</sup>め<sup>九</sup>に<sup>一〇</sup>満<sup>一一</sup>海<sup>一二</sup>を  
ウ<sup>七</sup>ラ<sup>八</sup>ル<sup>九</sup>バ<sup>一〇</sup>イ<sup>一一</sup>ガ<sup>一二</sup>ル<sup>一三</sup>打<sup>一四</sup>越<sup>一五</sup>えて  
思<sup>下</sup>づ<sup>は</sup>は<sup>無</sup>念<sup>の</sup>極<sup>み</sup>なり  
國<sup>六</sup>に<sup>七</sup>盡<sup>八</sup>せ<sup>九</sup>し<sup>一〇</sup>大<sup>一一</sup>丈<sup>一二</sup>丈<sup>一三</sup>の  
郷<sup>中</sup>音<sup>の</sup>澁<sup>に</sup>ま<sup>つ</sup>た<sup>ら</sup>み<sup>の</sup>  
末<sup>切</sup>まで<sup>遠</sup>く<sup>流</sup>る<sup>らん</sup>

備<sup>ひ</sup>後<sup>ご</sup>三<sup>さん</sup>郎<sup>らう</sup>

踏<sup>三</sup>みに<sup>四</sup>じ<sup>五</sup>ら<sup>六</sup>む<sup>七</sup>も<sup>八</sup>夢<sup>九</sup>を<sup>一〇</sup>れ<sup>一一</sup>や  
あ<sup>中</sup>ら<sup>ま</sup>し<sup>車</sup>も<sup>ま</sup>ば<sup>ら</sup>し<sup>か</sup>  
氷<sup>七</sup>漬<sup>八</sup>屍<sup>九</sup>と<sup>一〇</sup>消<sup>一一</sup>え<sup>一二</sup>か<sup>一三</sup>ど  
清<sup>下</sup>き<sup>其</sup>名<sup>は</sup>羊<sup>代</sup>と  
絶<sup>下</sup>ゆる<sup>時</sup>なく<sup>け</sup>が<sup>れて</sup>  
末<sup>三</sup>まで<sup>遠</sup>く<sup>流</sup>る<sup>らん</sup>



元弘二年春の末

畏きあたりおそにあきき荒あび

三 白皇帝みをはるくぐと

遷うつし奉まらん事ことの由よし

七 爰こゝに備後之郎高德たかのりは

五 勵まし語ことばひひ鳳ほう輦げんを

三 船坂山ふねざかに向むかひいに

花はなに厭いとひい世よの世の世の世

三 恐おそ多おほくもも萬ま乗のりの

四 波路なみぢだつるつ隠岐國おんぎのくにに

四 はやは隠かくれなく聞きえけり

六 我われを見てみ勇ゆうむむ人ひと々々を

四 嶮あや且かつに要もとすす傳つたはんと

四 敬やう言ごん國こくのの武ぶ士し共とも今いま宿しゆくあり

山陰道さんいんに道みちを替かへ

四 聞きいてい何なにれも顔かほ見み合あは

五 山やままた山やまを攀のぼりが越こえて

六 急いそげや急いそげと走はりゆく

六 かのすの嶮あやのはしなくも

中 寶輿たからごしは早はやも杉坂すぎざかの

四 かりしければ同志どうしの面おもて々々

三 遷うつ幸さいをし奉まりしと

六 さらば是こゝよりより滿み違ちがひに

四 武運ぶくゑんの程ほどをを美み作さくや

五 思おもひい事ことはあぢあきあななや

四 再またびいららにに行いくはい

院いんのの庄しやうへへとと入いらせ給たまふふ

力ちからも意い地ちももららぢぢけけつつい

皆ちりぐに決せけれ共  
折だにあらば赤心を  
激躑を安じ捧らん  
穂いこそ見えぬ荒すぢ  
忍び寄りたる浙もよし  
警言備おこたる垣の外に  
是れ屈竟と肯き寄り

獨り勤王無二の高徳は  
天津室まで聞え上げ  
そは降る雨にたより得て  
一重の裳に身をよつし  
衛士のたく火もほの暗く  
一本繁るる老木の櫻  
幹を削りて武士の

採り墨汁の速かに

赤き心をくろぐと

十字の唐詩書きしるす  
天莫空句賤

時非無以泥象

漸ちん認め覺涌と笑み  
所座所の方を拜し奉り  
餘人に後れは取り奉らず  
回天の大業にしも

大地に煙と平伏して  
微臣高德報國の丹心  
きは言へ獨力空拳にして  
微塵一じしも建がたし

あはれ孤忠を哀れ見まし後死と

三 悄然として立ち去りけり

彼の唐詩の由聞し召し給ひ

三 拜し捧るぞありがたき

そこと知られぬ夕露と

いさこの花は永久に

三 づき奉りて敷島の

心のうちには奏上し

程もく翺ろる東雲に

三 龍顔いともうるはしく

嗚呼身は下ながら嬉しけれ

消にし後の香はけり

咲きて榮ゆる櫻の宮

大和ごころの龜鑑とて

切 譽れはあまに残らむ

二 平野次郎國臣

二 天日嗣の御業はは

のりし給ひ大神の

三 四方の海原を騒

三 神心痛めましますものを

征夷てふ事知らやその

譽れはあまに残らむ

三 天壤共にかはりどと

神の御末の天皇は

三 波風あらまき世の權に

征夷の職の將軍は

如何にいと聖敷かに

六 筑紫の果の賤の男が  
四 言詞ひ掛けし燈しきた  
四 呼ぶは答ゆる山彦の  
七 平野次郎大中臣の國ほは  
三 義理の絆や情の糸  
三 思ひ切たる浮浪人  
四 時の天下や諸大夫名

五 時の天下の將軍に  
三 六十餘州の甲冑かこ  
五 聲凄まじく響きけり  
五 衝國思ひの一と筋に  
三 養ひ親も妻も子も  
四 斯てそ心安かれと  
四 別ては麾下八萬騎

四 總敵とてたあらはず  
三 靡かぬ草はあじとぞ思ふ  
四 心の中ぞ不敵なる  
春上 我衣手の涼きよ  
下 ぞいる心の躍るなり  
六 詩歌管絃のたしみあり  
三 此面白き月の夜に

六 天津風吹く錦の旗の手  
三 聲交かに唱ひたる  
三 桐の一葉に秋は来て  
三 隈なき月に向ひては  
七 酒より猛き國臣も  
三 風遠優美の武士なれば  
三 日頃秘藏の名笛を

冬上  
吹きすさびつゆのうらなく

烏帽子素袍に高足駄たかあしだ

太刀を佩きたる其様ぞそのさま

かゝる所にいしるより

とも何者とは笛の音はなごのね

やそら其子を捕ふれば

い達の間の夢にたも

あこがれ出しぬ装はぬまゑ

熊の皮なる尻掛けの

げにあやしむも勇ましけれ山鳥

腰の邊りをつたきしはあたり

はつたと息めど驚かずおどろかず

擽て年月経ぬれども

いとも忘れぬ我子なるわがこ

七 物に衝ぜぬ細径も

五 懐ふ手先に引寄せて

三 梅上げつても月影につきのかげ

涙に眼とらもりけり

口には斯い言はぬも

三 深山の奥のおふかみり

三 軒端に葉ふ燕さしつばき

心やつたぐみだれけん

五 顔にかゝる黒髪をくろかみ

三 我子の顔を打見れど

六 國臣高ほの抱き上げくにのみこ

歎も心ぞあはれなるなげ

三 子をいづとも心あり

二 雛を育つるまじひありひな

六 ずてや我は想愛の  
三 忠義の道の重ければ  
七 我若し武士と生れずば  
五 畝の畑には桑を植へ  
三 いと樂しむも老なると  
九 おりて取りし此歎  
五 物に狂ふと言はく言く

六 心は人に芳らぬど  
五 情無き事もすぞかし  
六 百畝の田には稻を植へ  
三 妻も同胞ともぐに  
二 藤に住む蟲の我がらに  
五 世の人々は我を見て  
三 真の武士の踏む道は

三 只一筋の此道ぞ  
四 夢なみ懲りぞるも孫も  
五 柳園の鶴に泣きなん  
五 眞幸かれよと祈り  
五 袖打拂ひませ去れば  
九 泣聲いごと哀れなり  
四 捨てはすそが年経ても

四 父が果敢なき身の末を  
四 次郎が血統盡るまで  
六 哀れ我もよ安かれよ  
五 抱きしめたる手をはなし  
六 跡に聞ゆる幼児の  
三 天晴れ平野が世の爲めに  
三 忘れぬ物は我子ぞと

一首の歌の述懐は

昔の人の世の為めに

色香めをたき其花は

國の瘡と匂ふたより

白虎隊

維時慶應戊辰の秋

明て梅き戸の口に

あはれ世を讀みにはん

盡す心の真に咲く

明治の沖代の春風に

國の寶と匂ふたより

八月二十三日の曙や

走せ着く甲斐を渚漕ぐ

敵の兵船みづがみを

けやかひに登る葎山路

眼にも餘れる大軍を

人数もわづか三十七

危急の難に氣を勵み

節を九鼎の重きに比べ

人の花をふ雅見櫻

渡りて跡し志ら浪と

雲か霞か將た山か

邀へ遊人と少年の

忠義の二字に身を固め

命を鴻毛の軽きに置き

忠勇義烈の武者旅は

此一團を名に負ふ

群羊を驅る白虎隊  
 衆寡敵せず堵郵の  
 無慘やつひに敗績し  
 礮烟彈雨の中を越ぎ  
 漸ては今ぞ是非をなし  
 我等が進退決せん  
 漸く飯盛山に攀登れば

一ばし奮戦防ぎしも  
 斧の壁にことならず  
 残るところの十六士  
 丘の麓に一りぞきて  
 君の沖流途現奉り  
 割をつみ剣を杖つき  
 こはそも如何に悲しや

渦巻く黒烟舞ひゆる  
 無限の感慨湧き出て  
 流れて袖を浸しけり  
 砲聲山嶽を動かし  
 そのさま實に凄まじく  
 遙に城中を伏し拜み  
 君ほろびひ國滅す

鶴が城のありさまに  
 流る涙は瀧澤の  
 斯もこそあれ敵軍の  
 鯨波天地にふるひ  
 城己に陥りたる如くれば  
 孤城天下の大兵を受け  
 臣等が事遂に畢りぬ



嗚呼 諸侯よ我父母よ  
受けし沖恩や 慈愛  
縁て諦め居られども  
御訓戒の言の業も  
盡きぬ名残をいつかにせん  
敵の妨害受らるべし  
残る忠孝つくさんと

十六年がそのあひだ  
漸ひん時は斯と  
きのふまみえし 佛也  
耳目に今も留まりて  
さは言定時志移いなば  
しぞ諸共に泉下に  
瀑いそぎよく決りし

七十

七十一

飯盛山のあさつゆと  
漸は枯れても 若松の  
常盤堅岩に遺らめ  
其志や 懋む  
塔むす下に吊らむ

廣瀬中佐

維時 明治二十七年

與に裸敵を消にけり  
漸ぬ名こそは千代かけて  
主師に逆ひ 罪あるも  
悲烈 悲壯の魂を  
塔むす下に吊らむ

項は弥生の末の方

三十一

我七十七士の決死隊  
勝を一舉に決せん  
浪を蹴りて進みゆく  
数度の夜打に怖れを  
いと嚴重に警戒し  
光の下によろ見れば  
此有様を見るも

二度旅順の口を閉塞し  
港口さへも驚然ら  
港を守り敵艦は  
又不意打もありんか  
深夜燈を照らしつ  
又もや寄せし閉塞船  
夥多の要塞艦艇は

七十三

撃てやかれの号令も  
其筒音は百雷の  
飛び来る丸は凄く  
降り注ぐが如くたり  
福井米山千代彌丸  
我團結の勇士等は  
旅順の口に猛進す

あつや先なる亂れち  
轟きわたる如くして  
砲が激かしく雲の  
去れども之を物をもせず  
四隻の船に合乗せし  
逆巻く怒濤を燃破り  
斯くて廣瀬中佐は

七十三

三 福井丸に乗込みしが  
五 洋に船を沈めし  
六 豫て任務に當りたる  
四 爆發薬に懸以せん  
五 漸もこそあれ敵艦より  
六 福井丸に命中し  
六丁 船は烈しく動揺し

四 豫定の位置に達せし頃  
五 一聲高き號令に  
五 兵曹長杉野孫七は承り  
四 急き船艙に下り行く  
五 放ちし魚形水雷は  
七 轟く音ともろともた  
五 は如沈没し始めたり  
七丁

四 されば端艇を繰下し  
三 こそ人負を捨むれば  
三 あたりに敵は見えざり  
六 情に深き武士なれば  
三 一度船に立ち歸り  
五 船體次第に傾きて  
三 中佐は己を打落れ

四 一同之れに乗移り  
四 杉野兵曹長一人  
七 中佐は部下をうつむ  
五 杉野の存在を尋ねんと  
三 呼ぶと落さず者もなし  
六 愈々危険迫れども  
三 再び三度往たり

三 陽なく渡る船の中  
三 消えて果敢なき有様に  
四 最早是れ返なりと端艇の  
五 飛び来る敵の弾丸は  
六 アツと言ふ間もあらはこそ  
六 姿は見えずなりにけり  
六 唯一行の肉塊を

二 水は遂に水泡の  
二 今詮すべあふされば  
三 纜切るや一刹那  
三 あはれ中佐に命中し  
五 血汐にあたりに送り  
三 流石に猛き武士も  
三 戦死の形見と留めつ

三 名譽の死をぞ遂にける 十五号

七生國報

四 嗚呼廣瀨中佐の誠心の  
中 千代萬代の後までも

三 我日の本年の日の旗と  
五 語り傳つて残さなん

蕾の花

春上 玉と砕けし 護切は  
下 武士の鑑とたへられ  
三 共に世界に輝き

含笑上船

一 盛りの花も散るは常

二 源氏の棟梁左馬の頭と

三 平治元年十二月

四 武運拙なく打敗れ

五 諸も落ち行く人々は

六 主従僅に二十餘騎

七 立木といざや白雲を

一 有為轉運ぞ是非なき

二 世に時めきし儀朝し

三 平家方との合戦に

四 都を逃れ出で給ふ

五 朝長頼朝を咎めし

六 唯すくくと遠近の

七 馬の蹄に踏しだま

一 鑽凍もくも山りしが

二 鎌田兵衛政家を

三 我等都を去らば

四 姫は敵あぞ因れん

五 姫をりしなひ来れよと

六 君が何せをかこみて

七 都の方へ返りけり

一 やがて義朝馬を止め

二 ほより間近く招き寄せ

三 女が許に残りつる

四 汝是より引返す

五 つれなき様こそ慈悲も

六 政家馬をあおりつ

七 若に六條堀川の

流れも清き源との

讀經に勤め居給ひが

汝よくこそ歸りしよな

流石は武門の姫なれば

訊ね問はさせ給ふにぞ

暫し口籠り控へしが

今日の戦不幸にも

義朝の長女枝桑姫は

政家の入り来る姿所覽し

戦の様如何にぞと

年端ゆかぬぞ凜じとも

政家ハット胸迫り

漸く僅に顔を上げ

味方利を失ひ候ゆゑ

大将には東國へ御備き—あるづし—の御事にて候

まては父上には東へ—あはれ—御下向あらせ給ふとぞ

嗚呼今の今までも

顔打ちも覆ひ伏し給ふ

轟く胸を押し鎮め

故ら見極めまゐるれとぞ

聲ふはせて申しければ

政家涙に圓ひ居たりしが

父君には姫の御身を憂ひませ

此政家を歸し給ひて候と

姫は容姿をあらためて

推ふに責まきも 幾しきも

弟頼朝は十三歳にてあり 頼朝

妾は一ツ慶りの御ならに

又も 懽かせ給ふこと

姫は涙を堰止めつ

汝が許に養はれて

湖暮過かと思ひ

女子冠かなしき者はなし

陣に従ひ出でつるに

所供とても叶はずと

懼りせめて哀れなれ

我幼少にして母上に後れ

是迄のころる使ひ

せめて名残に故上に

謁見たとは思つども

今は誰我首を斬り

湯洗せしむも宣ひて

鎌田兵衛は姫君に

茲に十四年の春を迎

前々如何も罪業を

詮方なくし 諦りのつ

御跡ふたふ事しなりの難し

父上の御心を安めよ

合掌してぞ待ち給ふ

襦袢の上より侍きて

蕾の花を散らすとは

涙の割に迷ひしが

さらば御悼しとは候へども

九巻下

木

のたま

金

十九号

十一号

三 柳首級を下し賜はれと  
六 髪黒々と頸清く  
三 果報めでたき後の乳  
五 五體痺れて立ちすゑみ  
五 胸を切りさく思の奴  
六 天晴武勇の攻家も  
六 折しゆ聞ゆる人馬の響

五 背後に立ちは立つれど  
二 源氏の息女と仰がる  
五 見るに目も暮れ心消え  
六 カウリと落す太刀より  
七 百萬の敵にも恐れざる  
五 暫時ためらひ居たりけり  
四 は七討手の軍兵守つるか

四 漸ては瀟灑なり難しと  
五 竊に背門より忍びて  
三 近江路指してぞ落ちにけり

四 急遽に姫を籠まつ、  
六 近江路指してぞ落ちにけり

三 関三 曾我の夜討

三 建久四年の夏ははや  
二 黒白もつかぬうは玉の  
三 將場に見ひようたちは

三 半ば過ぎぬる五月空  
二 周をぬひつゝ富士が根の  
三 花澤山の夕露と



三 消えし河はかたみなり

五 不俱戴天の親の仇

五 討て親考首身靈の

甲 思ひ起せし一筋糸

中 目指す陣巻を何れぞと

七 手燭いそめて立出でし

五 思ひ入たる閨の内

六 十郎五郎おとどひしが

七 上藤左衛門尉祐盛を

三 亡執情させ事らん

上 道は素より迷はぬぞ

下 尋ねぬひたる新しよし

六 澆がたうさけのーるべにて

四 無常迅速一呼吸

冬 生死の際にありとしも

下 如何なる空やたゞるらん

四 名乗るあけつ、祐盛が

五 敵も名ふおふ勇者を

一 枕刀にかけける手の

六 ひらめきわたる稲妻の

五 忽ち聞と優曇華や

中 知らぬ熟睡の夢はそも

四 二人は顔を見合せて

枕を了と就とはせば

五 岸破と起りや沈手なる

七 此時早く頭上に

光と共に煙の

上 ころんと十八年来の

中 恨は晴れて世の中に

三 組父が敵の右幕下を

五 郎来れと 結成が

六 常より血氣の時宗が

不知今夕是何夕

直穿虎穴斬虎兇

斯くて左馬門尉祐徳を

五 望みなき身ぞさきらは

討て冥土の友にせん

漢みに勇む獅子奮迅

いかでたゆたう事やあら

是天假我復讎時

霜刃貫来血鬪骸

討たるよしを呼はるにぞ

やがて 強もや 十番組

一 寄手の中に切り入て

北より 南 西 東

掛つ流しの虚實を盡し

時しも胸を貫ぬらば

十郎の首取たりこ

力も折れて軟よ竹の

心得たりと 説き弟は

一 旗打波のまくり斬り

蜘蛛手かく 繩十文字

當るを幸ひ 薙ぎ拂ふ

新田の四郎 忠經

呼ばる聲にはりしおけ

風もも 想えぬ 一佳人

一 鷗ぎ目深に淵らを

二 むんぎと組し五郎丸

三 眺みながらに効足

四 武運も茲に碎かれて

五 川の流れの味れなごで

六 悠々爰に七百年

七 志ろきは君が名なりけり

一 思び行よと見る中に

二 もの〜とやと時宗が

三 幾矢とふれば椽板も

四 先に付ふ死出三途

五 行きて歸らぬ年月も

六 何げば高き富土よりし

七 祐野の秋の草のみが

一 思づは袖に雨露を散る

二 木村長門守

三 柳豊大綱の遺臣

四 秀頼公の近侍にそ

五 誠忠無二の臣なりけるが

六 姿に隠れなき美姫とて

七 香は四方にまこえけり

一 思づは袖に露ぞ散る

二 木村長門守重成は

三 柳親のみも他にまきり

四 その雄豪勇なるに似ず

五 浪花江に咲くこの花と

六 ことに大藏卿局の姪に

七

五 青柳とちん呼ばれし

三 ころは二八の春すぎく

四 はたへすぐーき衣通の

七 古今まれなる美吟と

五 梅とさくらとたいつ

下 二のぶとはめそやせり

四 にはかにおこる蘭東の

最とさーき手弱女の

四 夏来にけりし白妙の

ながれなるもむ花の御

六 かの重成とさきくらべ

一 くらも知らぬも大政の

然るに慶長十九年神皇月

四 鐘の御音にいざなはれ

三 是非を干戈に許しが

四 またあら玉の大沖代は

七 此時母のぼねは青柳の

四 睦月七日に重成と

五 かたらひいとも濃かに

下 月見ぬ人ともなりたけり

五 和睦の花は吹きやふれ

四 程なく師走に和睦して

四 元和元年となりける

五 糸の縫れをもぐきの

四 凍着の契結ばせければ

五 やがてふれや青柳は

六 からそ彌生のことら風に

ふれと思ふ東の間も

一 ちとほらざる五月間

二 三すがの金城鐵壁し

三 されば忠義の重成は

四 このときとなりと決心し

五 出陣の神許をひまわり

六 ホロりと落ちし恩愛の

七 さままけりとも装ひつ

一 血の雨降らす敵軍

二 頼み難らざる見はにける

三 一死君恩に報ひん事

四 君の神前にすえみせで

五 是れ今生の神別れと

六 涙を袖に押しつゝ又

七 五月五日の夕まどられ

一 若江口にもぞ向ひける

二 いたぐら境に空薫の

三 忍の緒をも断ち切りし

四 明る六日のたなかひに

五 たなかひ酣なりけり時

六 井伊直孝に攻まられ

七 務ぎかわりてぞ見はければ

一 もとより必死の重成は

二 伽羅の香をたき込めり

三 一世の譽のこそきんと

四 武勇を顕は結ひが

五 徳川方の旗がしら

六 忠勇無双の重成も

七 士卒等馬前に立ち塞り

四 闘き終へるとさむれど

七 火花を散らす激戦に

五 血汐したたる槍の柄を

六 常々敵をば突き除けて

四 かる所へ井伊の光將

五 槍を揮つて馳せ来れば

三 我は大阪方にかくれなき

五 重成まかす馳せ進め

六 士卒はたれて唯一騎

にぎりかためつ石銃

勢し勦をぞいふせける

庵原助右衛門と名乗掛

よき敵こそとごんたれ

木村長門守重成ぞと

五 たがひに槍を合せたり

四 庵原の槍を受損じ

五 ドウと許りに落ちければ

五 おりかきなりて重成が

四 嗚呼忠臣重成は

三 哀果敢なく討たれど

五 悲歎の涙をおさへつ

五 木村が運や盡きにけり

四 馬上に溜らば真内向に

三 庵原が若黨ごころ

首をこそは上げたけれ

四 二十一歳を一期とし

七 あとにのれる青柳は

三 江州馬淵にゆかりあり

三 莊宮が詩にたより行き

四 とき夫の跡起に吊ひて

六 みどりの初雪を生み残し

三 自害をすてぞ果てにける

七 おのしも一聲はとぎす

五 無常を告げて遠近に

正 かきこぼすなら花や

三 勇士烈婦の夢の跡

五 みしかき筆の命毛に

五 かぐも哀れのかたり草

三 手向の〜〜に誇ひけり

句當内侍

関二

一 爰に新田左中将義直は

一 逆賊北條高時を誅伐し

二 建武中興の大業を奏しはれが

二 帝の冲寵遇最と日出度

三 禁裡守復の宣旨を蒙り

三 夜たゞ内園を遊園給ひが

六 或る夜も受けて大内の

六 松に宿れる月影し

四 千草に集く虫の音も

三 あはれを誇ふ折もに

四 仄かに聞ゆる玉琴の

七 注や誰ともしら露を

六 端しだきつ垣間見れば

七 世にも稀なる上臈の

月ツキに對たいひて檢けん鳴ならす

そごろに心こころ引ひきれて

人の氣色きしきにく深ふかき

萎しな伏たしたるあてあてやかき

拾ひろはる消きえむ玉たま毎まいの

隈くまなく月つきは映うつしなながら

義ぎ貞ちん志しははしし洗せん物ぶつと

下した水みづのしららぶも燈あかり渡わたり人ひと

秋あきの戸と近ちかく立た寄よれば

涙なみだのて手てをや止とめ願ねがひ見みて

折やらば落おちなむ秋あきの露つゆ

露つゆ散ちりあまほ仇あだなれば

戀こひの閑ひま路ぢに迷まよひひり

立た煩わづひくおははしが

志しのめ味あじづる鶏に

名な残ご惜しむ退けけり人ひと

句く當あ内うち侍しやうと聞ききけれが

唯ただひとすぢがに方かた取との

内うち侍しやうに和わ歌うたをぞ送おくりける

我われ社やしろのな涙なみだも宿とどる新ぞとも

志しらで雲くも井いに月つきやすむらん

螢あせかされて内うち裡ぢをは

さる程ほどに義ぎ貞ちんはは彼か美み人ひと

今いま我われ慕こふ音を知らんと

思おもひつる矢に指もなく

内うち侍しやうに和わ歌うたをぞ送おくりける

我われ社やしろのな涙なみだも宿とどる新ぞとも

志しらで雲くも井いに月つきやすむらん



七 匂當内侍は之を見て

八 帝の聞けし召結はんも

九 何の答も為さざれば

十 思ふとすれど色に出で

十一 下さしやとわびつるを

十二 帝はあはれと思召され

十三 厚きなまきの沖盃に

十四 物のあはれを感じきも

十五 忌憚ありと御けて

十六 さすが思も益良使の

十七 物や思ふと問ふ人の

十八 下さしか此事聞えけむ

十九 内侍の折ふ義貞を召結ひ

二十 内侍を添て下し賜ひければ

二十一 義貞いづくかよきみぞ

二十二 内侍の花のかんはせむ

二十三 それかあらぬか紅の

二十四 まばいさ程に見はけり

二十五 今うそ宿のつま衆うと

二十六 越路の源や藤一まの

二十七 後の虫迄も郷者きけり

二十八 頭も擡け得ざりける

二十九 夕陽うつらふ紅葉々か

三十 潮みなきる風情にて

三十一 月にしるべし虫衆も

三十二 末の緒掛けて袂しを

三十三 いかり尊きつきを

三十四 初傳巻畢

大正三年九月廿六日印刷  
全 年十月二日發行

定價金參拾錢

作曲水也田旭嶺

發行兼印刷者 前田梅吉  
大阪市東區南渡邊町八番地

大阪市東區南渡邊町八番地

發行所 前田文進堂

電話東四九九八  
表替版一二四七二

東京市神田區表神保町十番地  
巖山堂書店

禁轉載

270  
577

終

